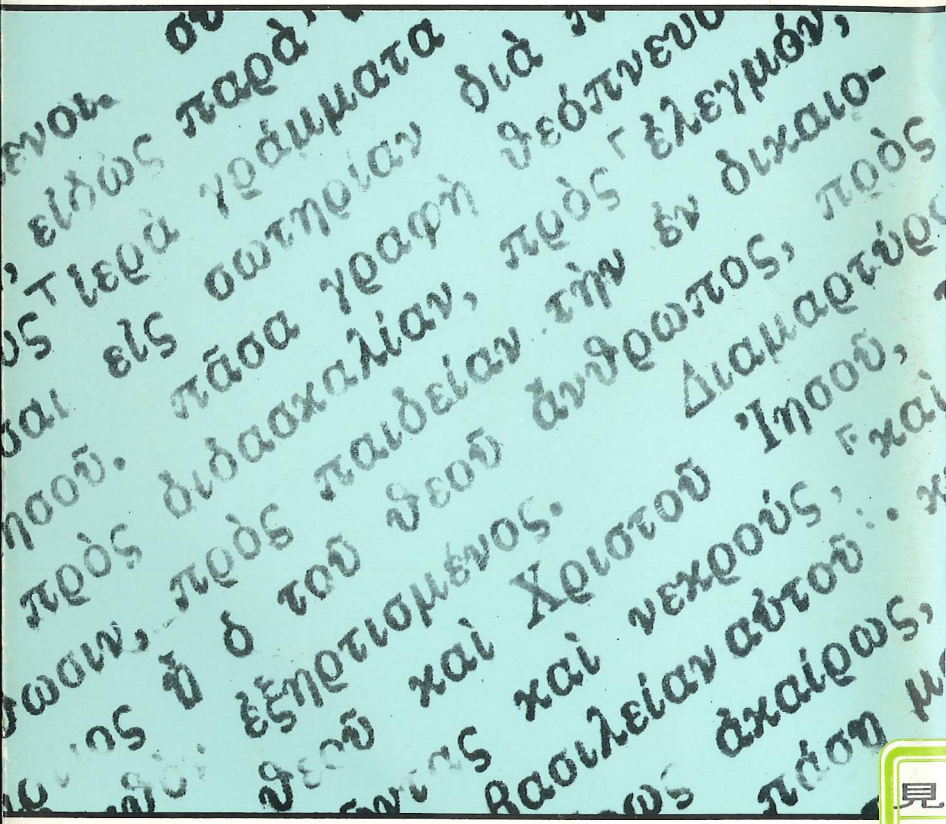
聖書は神の言

THE BIBLE — THE WORD OF GOD



聖書は神の言

日本ウェスレー出版

日本ウェスレー出版協会

見本
禁帯出
出版局

¥ 200

聖書は神の言

ウェスレー・ブック・クラブ

日本ウェスレー出版協会

THE BIBLE — THE WORD OF GOD

THE WESLEY BOOK CLUB

Japan Wesley Publishing Association
11-11 Nakamaru-cho, Itabashi-ku
Tokyo 173, Japan
© 1971

序

人類に与えられた書物の中で最大の書物、書の中の書は、「聖書」であります。ただにその発行部数において最大であるというだけでなく（一九六九年度中に頒布された聖書の数は、全世界で一億一千余万冊、日本だけで四百八十余万冊であったと言われます）、その人類にもたらした影響と感化、その内容の真実性と深さにおいて、聖書はまさに比類なき書であります。

特にクリスチャンにとって「聖書をどう見るか」は、私たちの信仰と実践と宣教を決定する生命線であると言わなければなりません。

▽「信仰」を決すると言いますのは、「何を信ずるか」との問いに対する究極的な根拠と権威を私たちは聖書に見いだすと言う意味であり、もしこれを否定するならば、私たちはキリスト者としての信仰と確信の全根拠を失うことになるのであります。神について、人間について、救いについて私たちの持っている信仰は、「聖書がそう記している」からであって、限られた私たちの理性に基づいた決定や結論ではないのです。

▽「実践」を決すると言いますのは、私たちの日常生活の基準を聖書におくか否かは、私たちのあり

方を決する生命的な問題であるとの意味であります。この決定がなければ、道徳や倫理を規定する究極的な権威を私たちは持たないことになってしまいます。

▽「宣教」を決すると言いますのは、聖書に対する全面的な信頼と服従なしに、教会とキリスト者は、移り行く時代と社会に対して、不変の真理を確信と権威を以て宣証することが不可能となることを意味します。教会が過去二千年間、この世に対して果敢な宣教活動をなし続けてきたのは、聖書がそう命じており、聖書が伝えるべきメッセージを示しているからに他ならなかったのです。

結論的に言えば、私たちは「聖書が誤りなき神の言である」との立場に堅く立っており、このことは教団の『教義及条例』の中にも以下のごとく明記されています。

「聖書は神の十全なる感動〔霊感〕によりて与えられ、原典に於て全く無謬（むびゅう）であり、人の救いに要する凡ての事に於て人に関する神の御意を示している。従ってその中に見出されざる何物も、或は之に確認せられざる何事も、信仰の箇条として信ぜらるべきでなく、救いに必要或は肝要と考えらるべきではない〔下略〕。」

本書ではこの立場から

聖書は神の言――その意味

聖書は神の言――その歴史

聖書は神の言――その証拠

の三項にわたって考察することと致します。

目次

序

第一章　聖書は神の言――その意味……7
啓示の書……8
神の霊感……9
聖書の経典……14
写本と訳本……18
本文批評……24
第二章　聖書は神の言――その歴史……28
旧約聖書の中で……29
ユダヤ人の聖書観……30

キリストと使徒達の聖書観……31
教会史の中で……32
破壊的高等批評の抬頭……34
潮は変わった……37
第三章　聖書は神の言――その証拠……40
結　語……54
あとがき……58

第一章

聖書は神の言

――その意味

「聖書はみな神の感動によるものにして教誨と譴責と矯正と義を薫陶するとに益あり。これ神の人の全くなりて、諸般の善き業に備を全うせん為なり」

（テモテ后書三・一六、一七）

「聖書が神の言」であると私たちが主張する時、それは

▽消極的には誤りなきもの（無謬性）＝すなわち、教理的にも、歴史的にも、道徳的にも、思想的にも、何らの誤りも含んでいないということと、

▽積極的には権威を帯びた書（権威性）＝すなわち、「服従を要求し命令する権利」を持つ書であるということ

とを意味します。

啓示の書

聖書は神の語りかけ、神の啓示の書であります。神の啓示とは、

「神御自身、神の御計画、神の御旨に関して、また

人間とその贖罪に関して

自然界や直感や理性の過程によっては知り得ない真理を

神が人に対して伝達したもうこと」

と定義されます。

・神が人格を持っておられ、すなわち御自分の御旨をいかにもして人に伝えたく願っておられ、

・人が罪のゆえに神を知ることも、自分を救うこともできなくなったという事実を考える時、

・神が御自分を啓示されたということは、きわめて可能であり、蓋然的であり、当然であり、合理的であるとともに、信ずるに価することであります。

・聖書はこの神の啓示の記録、言いかえれば「神が人類に与えて下さった手紙」であります。

神の霊感

それではこの神の啓示はどのようにして伝達されたのでしょうか。前掲の聖句は

「聖書はみな神の感動による」

と述べています。この「神の感動」〔ギリシヤ語では、セオプニューストスで、セオス（神）とプネオー（息吹く、呼吸する、吹きこむ、名詞はプニューマ＝霊、風、息）の二語から成る〕は「神の霊感〔英語ではインスピレーション〕」とも訳すことができる語であります。霊感とは聖書に適用された場合、

「神が人々に息吹きを与え、その結果、人が神の真理を受けとり、伝えることができるようにせら

れること」

を言います。啓示は神の御旨の伝達の内容、事柄を指し、霊感は伝達の形式、方法を指すと言えましょう。

従って聖書の記者たちは、神の霊感を受けた書を私たちに与えるために、神の霊感を受けた人々であります。

そしてこの霊感に関して、私たちは「十全霊感」「逐語霊感」「動力霊感」の立場に立っているのであります。

㈠

「十全霊感」(プリーナリ・インスピレーション)とは霊感の〃範囲〃に関するものであって、聖書の全部分が同等に神の霊感(息吹き)を受けて記されたと教えるものであります。

×これは自由主義者たちの言う「部分霊感」すなわち、聖書には霊感を受けた場所と受けなかった場所がある、従って「聖書は神の言を含む」ので「聖書は神の言なのではない」という立場をハッキリと否定します。もしこの部分霊感の立場を認めるならば、「だれが霊感を受けた場所を決定するのか」という究極的権威に関する疑問と、「この立場は聖書自らの主張と相反する」という疑惑とを

残したままでおくこととなります。

アメリカの偉大な伝道者であったムーデーはその著書の中で、一牧師の所にボロボロの聖書を持ってきた信者の話を記しています。その信者は牧師に「先生、これはあなたの信じておられる聖書です。先生が講壇から『この奇跡は信じられない』『この物語は理性にうなずけないから受けいれられない』とおっしゃるたびに、私はその部分をちぎって見ました。これが先生の信じておられる聖書です」と言ったそうです。

神の啓示の書である聖書から、人間の理性と常識(それはだれ一人として一致することがないのですが)に反する部分を取り除いたら、後に残るものは一体何でしょうか。

㈡

「逐語霊感」(バーバル・インスピレーション)とは、霊感の〃程度〃に関するものであって、神の霊感は言葉の選択にまで及んだという説であり、神は御自分の願っておられるすべてのことを正確に記録させたもうたとの結論に私たちを導くものであります。

×この立場は当然、「思想霊感」すなわち霊感が及んだのは、記者の思想にだけであって、言葉に関しては、記者が選択した故に、誤りを含んでいる可能性がある、という考え方を否定します。誤り

なき神が誤りなき真理を誤りある人々の言葉を通して伝達されたとは、私たちの到底うなずき得ない所であります。

(三)

「動力霊感」(ダイナミック・インスピレーション)、或は「有機霊感」(オルガニック・インスピレーション)とは、霊感の〃柝態〃に関するものであって、聖なる記者たちが、聖霊の特別な助けを与えられて聖書を記録する時、彼らの個人的な性格や活動と少しも抵触しなかったことを意味します。この立場をウイリアム・エバンスはいみじくも次のように要約しています。

「聖霊は記者の注意力と研究と記憶と思考と理論と、言いかえれば全機能を用いたもうた。黄金は聖霊のものであり、器は彼らのものである。したがって神の角度から見れば、聖霊は人々を通して、自ら伝達しようと欲した事柄を明瞭に、忠実に与えたまい、人間の角度から見れば、聖書の記録は人々がごく自然に選ぶであろうと思われる言葉によって記された。それは神的であるとともに、人間的である。それは人の言葉によって記された神の言葉である。」

イザヤはイザヤらしく、パウロはパウロらしく記しました。しかも聖霊は彼らの記述をすべての誤りから守ってくださいました。神的要素と人的要素との完全な調和を私たちは聖書の中に見るのです。

×この立場は、一方においては「自然霊感」「天才霊感」、すなわち、音楽や文学の世界におけるのと同じく、宗教的な天才がひらめきを感じて記したという考え方を否定し、

×他方においては、聖書の一言一句が、記者の人格や個性とは全然関係なく、ちょうど秘書が録音機からタイプライターでメッセージを記すように与えられたものであるとする「機械霊感」を否定するものであります。

(附)

霊感に関する立場を決することはこのように重大な意味を持っているのですが、これに二三付言しますと、

▽霊感は原記者(モーセやダビデやペテロのような)によって記された「原典」に関することであって、後述する写本や訳本に関するものではないこと、

▽霊感は記録に関して言われるだけでなく、「記者」が霊感を受けたと聖書は教えていること(ペテロ后一・二一)、しかしその記者も聖書を記す時に誤りから守られたのであって、その他の場合には誤ることがあったこと、

▽霊感は聖書を記さしめるための聖霊の特別なお働きであって、その「期間」は旧約聖書の最初の書

が記されてから、新約聖書の最後の書が記されるまでであり、それ以外の期間に聖書は記されないこと

を私たちは信じ、主張するものであります。

聖書の経典

私たちの持っている旧新約聖書は、創世記からヨハネ黙示録までの六六巻であります。そしてこの六六巻を「経典」(又は正典、英語ではキャノン)と呼び、これらのみが霊感された書であると信じています。そこで当然発せられる質問は

▽これらの書はどのようにして一つの書にまとめられていったのか、

▽なぜ六六巻だけが経典として認められているのか、

▽経典を他の書と異ならしめているものは何かでありましょう。

(一)

旧新両約聖書を通して共通な事柄は

▽先ず神の霊感を受けた聖なる記者たちが各書を記しました。旧約の記者たちはモーセ、予言者、そして予言職を持たなくとも予言の賜物を持っていた人々であり、新約の記者たちは使徒たち及び彼らと同等の立場にあることを認められた人々でありました。これらの書には、神の霊感を受けたことが明らかであるしるしがあり、それは各書が記されたその時から認められるものでありました。

▽次に人々はこの神のしるしを認めました。大切な事は人々が認めたからある書が経典に加えられたのではなく、霊感を受けた神の言であるゆえに人々から認められたのである、ということです。

▽第三にこの神のしるしを帯びた書が一巻にまとめられ、そうでないものは拒否されました。疑いもなくこれは神の導きに従ってなされました。

旧約聖書がまとめられた後に、あるユダヤ人たちからある書に関して、それらが経典の中にとどめられることが適当であるかどうか、という疑問が出されましたが、これはさしたる重さを持っていなかったために、ユダヤ人たちの一般的な考え方をくつがえすことができませんでした。

また新約聖書の経典が形成されていく段階において、論議された幾つかの書がありましたが、聖霊の導きにより、二七巻は徐々に教会とその指導者によって承認されるに至りました。

二

このような経緯を見る時、私たちは経典を構成する六六巻の書が、いかなる教会々議によって宣言せられたものでもなく、多くの書から選び出されたものでもなく、聖霊の導きによって、霊感された書が集められ、認められるに至ったものである、と結論することができます。

そしてこの結論は、「この六六巻以外のいかなる書も経典として認めない」という私たちの立場を示します。

経典の中に認められていない

▼「経外典」(アポクリファ＝かくされたの意)も

▼「偽作書」(スーデピグラファ)も

私たちは経典として認めないのです。それらの書は

▽権威を欠き――自らの霊感を主張しているものは一書もありません。

▽内容的にも正確さや信憑性や統一性を欠く部分があり

▽ユダヤ人にも(旧約に関しては)、教会にも認められたことのないものでありました。

従って「経外典」を容認するローマ・カトリック教会が、これらを容認しないプロテスタント教会

と合同で聖書を翻訳しようとする計画には大きな警戒を要することであります。

三

これら六六巻の原典はすでに失われてしまいましたが、旧約新約を問わず、その「写本」が注意深く作られ、また保存されてきた歴史を見ますと、これはまさに「摂理の奇跡」であると言えるのです。例えばユダヤ人が旧約聖書の「写本」を作成する時には、次のような厳密な規則を守らなければなりませんでした。

▽筆写は資格を持つ写本家によってなされなければなりませんでした。

▽筆写に用いる皮もひもも、潔い動物から、しかもユダヤ人によって準備されなければなりませんでした。

▽各欄は四八行以上六〇行以内で、

▽インクの色は黒だけと定められ、

▽いかなる文字も記憶から記されることは許されませんでした。写本家は権威のある写本を前におき、写す前に一語一語声をあげて読み、

▽「神」という言葉を記す前には敬虔にそのペンをぬぐい、「エホバ」という言葉を記す前には全身を

洗ったのです。

▽文字の形と間隔、ペンの使用法にも厳密な規則が適用され、

▽筆写の完成後は、三〇日以内にその巻物の吟味がなされ、一枚に一つの誤りがあっても、全写本が無効とされました。

▽各文字と各語は数えられ、もし一字でも落ちていたり、一字でも多かった時、あるいはもしある文字が他の文字と接触していた時、その写本は直ちに破壊されたのです。

この一見、極端とさえ思われる規則は、ユダヤ人がいかに旧約聖書を神聖なものと値積り、それを正確に伝達しようと努めていたかを如実に示すものであります。

写本と訳本

すでに述べましたように、聖書の原典は今私たちの手もとにありません。恐らくこれが偶像化されないように神が私たちから隠されたとも考えられます。

しかし私たちは無数と言ってもよい程の写本（写し）を持っています。

旧約聖書の写本は約一七〇〇

新約聖書の写本は約四〇〇〇

あると言われており、そのこと自体が聖書の超自然的性格を立証していると言えるのです。

特にこの中で『シナイ写本』と『死海写本』に関する興味深い物語を略述して見ましょう。

▽『シナイ写本』は、新約聖書、ギリシャ語に翻訳された旧約聖書（七〇人訳）、その他を含む写本で、紀元三四〇年頃に作られたものとされています。この貴重な写本は一八四四年、シナイ山にある聖カサリン修道院で、テイッシェンドルフ博士によって発見されました。彼はドイツの聖書学者であり、特に聖書の写本の研究には生涯を費した人でありましたが、この修道院を訪ねた時、廊下のくず箱の中に、棄てられて、焼かれるのを待っているたくさんの羊皮紙を見つけました。これは四三枚から成る旧約聖書のギリシャ語訳（七〇人訳）の一部で、テイッシェンドルフはこれを入手することができたのですが、彼があまりにも大きな喜びをかくすことができなかったため、人々は他の部分を持ち帰ることを許しませんでした。

一八五九年、彼は再びこの修道院を訪れましたが、ほとんど何も見いだすことができず帰ろうとして、執事と話し合っていた時、執事が七〇人訳を持っていることを知りました。驚きの眼を見張るテイッシェンドルフの前に拡げられたのは、七〇人訳だけでなく、新約聖書の全部とその他の写

本でありました。執事の部屋に泊ることを許された彼は、その夜まんじりともせず、写し続けました。後にこの写本はロシア皇帝に献げられ、テイッシェンドルフの手によって印刷されました。一九三三年、ロシア革命后、ソ連政府はこの写本をイギリス博物館に五〇万ドル（約二億円？）で売り渡しました。

▽一九四七年、「現代における最大の写本の発見」、すなわち『死海写本』と呼ばれる一連の写本の発見が開始されました。そのきっかけは一匹の迷ったやぎでありました。死海附近で迷ってしまったやぎをさがしていた一人のベドウィン人の羊かいの少年があるほら穴を見つけ、石を投げこんで見たのです。しかしこの少年の耳に聞えたのはやぎの鳴き声ではなく、土のつぼのわれる音でした。そしてその中には古代の巻物がはいっていたのです。

やがてその附近から数多くの貴重な旧約聖書その他の写本が発見され始めました。しかもその写された年代はキリスト誕生前一世紀、あるいは二世紀と結論されるに至りました。これは「現存する最古の聖書の写本である」と言われています。特にイザヤ書の写本が現在私たちの持っているのと実質的に同じ形で存在していたという事実は、私たちの信仰をいよいよ堅くするものとなりました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「ヘブル語で書かれた旧約聖書のメッセージを何とかしてギリシャ語で伝えたい」との切なる願いから生まれたのが

▽ギリシャ語の七〇人訳（セプチュアギント）と呼ばれる訳本であります。この訳本は紀元前二八〇年頃、エジプトのアレキサンドリヤに住んでいたユダヤ人によってなされたと一般的に信じられています。

この訳本は翻訳そのものの最初であったと考えられる貴重なもので、直訳というよりも意訳でありましたが、旧約のメッセージをヘブル語を理解しない人々に伝えるという大きな貢献を果たしました。

▽ラテン語の代表的な訳本はウルガタ訳で、ローマ・カトリック教会のダマスス法王の依頼によって、敬虔な学者ヒエロニムスが二二年間（紀元三八三－四〇五年）にわたってなし遂げたものです。彼はラテン語とギリシャ語に精通していただけでなく、パレスチナに赴いてヘブル語の勉学にも専念した人で、聖書を翻訳する適任者でした。その訳は初め、多くの攻撃と反対を受けましたが、それは徐々に静まり、トリエント会議（一五四五～一五六三年）において、ローマ・カトリック教会の公

用聖書とされるに至りました。

▽その他印刷技術が発明された一四五〇年以前に、ギリシヤ語、ラテン語をはじめ、アラム語、スリヤ語、エジプト語、アラブ語等々の翻訳がなされました。これらの訳本は聖書の古くからの存在を証明し、原典の本文を突きとめるために貴重な役割を果たすものであります。

▽英語の翻訳の中で著名なものは

・ウィクリフによる聖書（一三八四）――神の言を自国語で読むことのできなかった英国民に彼は直接聖書を読む機会を与えました。その死后、カトリック教会は彼の骨を掘り起こして焼き、灰を川に投じました。

・ティンダルの新約聖書（一五二五）――ティンダルはギリシヤ語から新約聖書を翻訳しました。英国内で仕事ができず、大陸で訳業を進め、海外から聖書を英国に輸送しました。彼はカトリック教会に捕えられ、絞め殺されて焼かれましたが、その臨終の言葉は、「主よ、英国王の目を開きたまえ」であったと言われます。

・欽定訳聖書（キング・ジェームズ訳）（一六一一）――一六〇四年、英国王ジェームズ一世は、約五〇名の学者を任命して、聖書の新しい翻訳に当たらせ、七年后に完成を見ました。これはその荘

重な翻訳の故に、今日もなお多くの英米の教会の講壇で用いられており、英語の基準となっているほどであります。

・その后多くの写本の発見や用語の変遷のために、新しい翻訳が必要となり、

改訂英語聖書（ＲＶ）（一八八四）

アメリカ標準訳（ＡＳＶ）（一九〇一）

改訂標準訳（ＲＳＶ）（一九五二）及び数々の個人訳

が刊行されるに至りました。

▽日本でも鎖国時代に、海外において、ギュツラフやベッテルハイムの手によって、日本語への翻訳が進められていましたが、一八五九年、最初のプロテスタント宣教師が来日し、一三年后の一八七二年に、第一回宣教師会議が開かれ聖書翻訳の計画が決議されました。一八八七年（明治二〇年）に元訳聖書と呼ばれている旧新約聖書の翻訳が完成しました。その祝賀会の席上で、ヘボン宣教師は片手に旧約、片手に新約をとって次のように語ったと言われています。

「完全な聖書！　西欧の民がこの民に贈る贈物にしてこれにまさる貴いものがありましょうか！

この聖なる書が西欧の民にとってもそうであったように、日本の民にとっても、生命の源泉、歓

喜と平和の使者、真の文明と社会的政治的繁栄の基礎となりますように。」

・一九一七年（大正六年）には新約聖書の改訳が完成し、改訳聖書と呼ばれるようになり、

・一九五五年（昭和三〇年）には従来の文語体から口語体に改められた口語訳聖書が完成、

・さらに翻訳者を福音的な立場からのみ選んで進められた新改訳聖書は、一九七〇年（昭和四五年）に完成を見ました。

▽現在世界には約三〇〇〇の言語があると言われ、聖書が一部分だけでも訳されているのはその半数に迄達しているとのことでありますが、残る言語に聖書を翻訳すべく、懸命な営みが、ウィクリフ・バイブル・トランスレーターズ等の団体によって続けられています。

本文批評

聖書は「原典」において誤りなき神の言であります。しかしこの原典は現在私たちの手もとにありません。そこで問題は

どうすれば原典を回復できるか

であり、これが本文批評と呼ばれる学問の目指す所であります。

▽前述しましたように聖書の写本の数は旧新両約を合わせて六〇〇〇近く現存しています。これは世界のいかなる他の書にも見いだすことのできない驚異的な事実であります。どの一冊の書が六〇〇〇もの写しを持っているでしょうか。このように貴重な「証人」のあることこそ聖書の比類なさを立証するものです。

▽しかし当然のことながらこれらの写本を比べ合わせる時、そこには多くの食違いが生じて参ります。かりにある人が一〇〇ページの本を書き、一〇人の人がその原本または写本から写しを作ったとするならば、どのくらいの誤りが生ずるでしょうか。いかなる誤りもなしにその本を写すことはだれにとっても不可能なことであります。ましてや——新約聖書の場合のように——ギリシヤ語で書かれてあるものを写さなければならず、字体も古かったとするならば、またそこには言葉や文字の区切りがなく、アクセントも強調のマークもなかったとするならばどうでしょうか。

▽しかしこのような多くの課題を抱えながら本文批評家は慎重にその仕事を進めました。その詳細を述べることはできませんが、彼らの取った方法は、

第一に、できる限り多くの資料（写本）を蒐集し

第二に、集められた資料を批評的に細密に吟味し

第三に、それらを比較し

第四に、集められた写本をいくつかの異なったグループや家族に分類すること

でありました。その結果、批評家は写本を四つの系統に分け、その中で中立系統と呼ばれるものが、数は最も少いが最も古く最上のものであるとの結論に達しました。

▽これらの資料に基づいて批評家は二つの角度から仕事を進めます。

第一は、筆写者が写じを作る時、どういう誤りを犯す可能性があるか、という角度からです。目から、耳からくる誤り、あるいは判断やペンの誤り等が考えられます。他の写本と比較しながら、批評家は本来そこにあった文字は何であったかを決定して参ります。

第二に、問題となっている箇所を記者の角度から考えて、「記者は、この箇所で何と記したであろうか」を決定して参ります。記者の立場に立って記者の文体や思想傾向、文脈などから見て、どの読み方が最も適当であるかを決定するのです。

▽この慎重な研究の結果、食違っているほとんどすべての箇所の読み方を決定することができ、そのわずかな残った箇所も、信仰の条項や義務の教えに影響をもたらすものではないことが明らかとなりました。

▽結論として、私たちは「原典をほとんど再現できると言ってさしつかえない」（A・T・ロバートソン）のであります。

第二章

聖書は神の言

――その歴史

「この律法の書を汝の口より離すべからず、
夜も昼もこれを念いて
その中に録したる所をことごとく守りて行なえ」
（ヨシュア一・八）

「聖書は神の言」という意味を前章で考察しましたが、本章では、「聖書はどのように見られてきたか」を歴史的に考えて見ましょう。

旧約聖書の中で

聖書はふつう「律法の書」と呼ばれ、これを神の言として重んずるよう命じられています。

▽モーセはカナン入国を前にしたイスラエルの民に

・律法を守って行なうだけでなく

・これを子孫に正しく教えるよう命じ

・将来の王たる者は律法の写しを絶えず手許において守るように命じました。

▽モーセの後継者ヨシュアは、神御自身から律法の書を口から離さず、ことごとく守って行なうよう命じられました。

▽ヒゼキヤ王は律法の書に基づいて大いなる宗教改革を敢行し、

▽ヨシア王は神殿の修復中に律法の書を見いだし、その言の前に身を卑くし衣服を裂きました。この書に基づく改革がそれに続きました。

▽捕囚から帰還した民は、学士エズラが律法の書を読み聞かせるのを起立して傾聴し、それが終わると直ちに服従を開始しました。

▽詩篇は終始、神の律法を高揚し、これへの服従を強く勧めています。特に一一九篇は全節が神の言の尊さを教えています。

▽以上は旧約聖書の中で律法の書がいかに重んじられてきたかのホンの数例にしか過ぎませんが、同じ強調は旧約の中で終始一貫見られる事実であります。

ユダヤ人の聖書観

▽新約の記者たちと同時代に住んでいたユダヤ人は、旧約聖書の一語一語が神から発していると信じ、そのように教えました。旧約聖書が霊感を受け、神から与えられ、権威をもっているものであることを認めました。

▽ユダヤ人の哲学者であり、アレキサンドリヤのユダヤ教の代表者であったフィロンは、律法の書を「神の霊感による最高の賜物」と呼び、予言書についても同じような表現を用いています。

▽また歴史家であり、パレスチナのユダヤ教の代表者であったヨセフスは、旧約聖書の神による霊

感と権威とを主張しました。聖書の全部分は予言者によって記され、予言者の言は神の言であると述べました。例えば、モーセについては「彼の宣言したすべてのことを通して神御自身の声を聞くことができると考えてよい」、イザヤについては「すべての人の告白として神の遣わしたもうた奇しき人が真理を語っている」と述べたのです。

彼はまたユダヤ人が聖書に対して絶対的な尊敬と注意を払っており、これを神からのものであると信じ、何人もこれに附加したり、これから削除したり、これを変更してはならないと信じており、むしろ必要とあらば、そのために生命を捨てようとさえしていた、と証言しています。

キリストと使徒達の聖書観

▽イエス・キリストは全旧約聖書を「聖書」「律法」「律法と予言者」「律法と予言者と詩篇」「モーセと予言者」「記されたり」との名称で呼ばれました。

彼は聖書を神より出て、神より与えられた、完全にして権威をもつ神の言として用いられ、聖書を不注意に読む者に対して驚きの言を発したまいました。

聖書中の人物、場所、出来事の歴史性や、聖書の無謬性について、キリストは少しの疑いもお持

ちになりませんでした。

彼の生涯は聖書を愛読し、聖書に親しみ、聖書を尊重し、聖書に信頼をおく生涯であったと結論することができます。

▽新約聖書の八人の記者たち――ヨハネ、ペテロ、マタイ、パウロ、マルコ、ルカ、ヤコブ、ユダ――はいずれも使徒、あるいは準使徒の資格を持った人々ですが、その記録した二七巻の書は、旧約聖書からの引用、引照、示唆に満ちており、彼らが旧約聖書を神の言であると信じ、それを自らの叙述の根拠としていることが明らかです。

例えば、パウロはロマ書において旧約から五五箇所の引用または引照をしており、重要な議論――すべての人が罪を犯したこと、信仰によって義とされること、神の選び、イスラエルの回復等――を旧約聖書によって証明しています。

聖書の霊感、権威性、信憑性、無謬性について使徒たちは主イエスと同じく少しの疑いも持っていませんでした。

教会史の中で

▽初代教会は旧約聖書に対してユダヤ人が払っていたのと同じ尊敬の念を抱いていました。また彼らは一致して新約聖書もまた聖霊の導きと霊感によって与えられたものであるとして受け入れました。全旧新約聖書は神の言であり、神の基準であると見なしたのです。

▽教会の教父たちはひとしく聖書の権威について証詞しています。例えば、

アタナシウスは新約二七巻を「経典化せられた神よりのものと信じられてきた書」、「救いの井戸」と呼び、「いかなる人もこれに加えてはならないし、またこれから削除してもならない」と述べており、

ヒエロニムスも「神によって霊感され、経典的である」との表現を用いています。

▽烈しい反対と迫害の嵐の中、聖書をもっていることだけで処罰されるような時代に、聖書は保存され、写され、伝えられ続けました。さまざまな点に相違点を持っていた教会の指導者たちも、聖書の十全霊感という偉大な教理に関しては一致していました。それは議論すべき問題とすら考えられなかったのです。

▽福音主義的な聖書学者、W・H・グリーンの言うように、

「一八〇〇年間、キリスト教会は、

聖書の十全霊感・無謬性・究極的権威を主張することにおいて一致してきた。
この法則には例外がなかった。
教会の各教派は
・多くの他のことにおいて大きく相違し、
・異なった『信仰箇条』を採用し、
・教会の儀式や政体に関して鋭く対立した質問を持っておりながらも
聖書が神の言であり、神の業であるということについては一致してきた」のです。

破壊的高等批評の抬頭

しかしながらこのゆるぎない聖書に対する信仰は近代に至って破壊的な高等批評の嵐にさらされるようになりました。高等批評とは本来、聖書各巻の年代、記者、構成、源泉（資料）、性格、歴史的価値を決定することを求める学問で、聖書各巻の経典性、純粋性、真実性、信憑性の諸問題を扱います。ですからこれは聖書研究の正当な、価値ある必要な分野であります。しかしこの分野に懐疑の嵐が吹き荒れ始めたのです。

▽それは今までの一切の伝統の「くびき」を無視、否定し、人間の理性を究極的な権威あるものと見なす考え方で、
×オランダ、フランスではスピノザ、シモン、クレリクス、アストリュク、
×ドイツではアイヒホルン、デ・ヴェッテ、グラフ、キューネン、ヴエルハウゼン、
×イギリス、アメリカではデヴィッドソン、G・A・スミス、ドライヴァー、ブリッグス
等がその主唱者でした。

▽その主張の要点は
①旧約の律法の書に見られるような高い宗教的概念は、モーセの時代にあり得たはずがない、イスラエル民族も他の民族と同じように最初は多神教であったのが、だんだん「進化」して一神教となっていったのである——
②従って、律法の書はモーセによって書かれたのではなく、彼よりも数世紀後（ある者は十世紀後とも主張する）に無名の記者たちによって記された断片が、無名の編者たちによってまとめられたのである——
③超自然的な啓示（神が御自分を人類にあらわしてくださること）は、理性的に承認することができ

ない。予言や奇跡も理性でわり切ることができないから、信じられない。

特にイザヤ書の後半（四〇―六六章）の予言は詳細であり過ぎる。前半と同一の記者によって記されたとは到底考えられない。恐らくバビロンの捕囚後、一無名記者によって――事柄の起こった前ではなく、後になってから――記されたものである。

ダニエル書の記者もダニエルではなく、後代の無名の記者によって記されたものである――

④旧約の他の書や新約の各書についても、従来まで信じられてきた記者も信じられないし、その内容も誤りを含んでいる――

＊　＊　＊　＊　＊　＊

それぞれの主唱者によって細かい点の相違はありますが、以上が大きく言って彼らの主張の要点であります。このような「自由主義的」と呼ばれる聖書観が、ヨーロッパに、アメリカにどのような大きい結果を及ぼしたかは言うまでもないでしょう。

筆者は学生時代のあるクリスマス・シーズンにL教授のドライブのお伴をしたことがありましたが（アメリカのニューヨーク州のこと）、L教授はショーウインドウのにぎやかなクリスマスの飾り付けを見ながら、「四〇年前にはクリスマスを祝うことすらはばかるような風潮があった」と語っておら

れました。不信仰と懐疑の波はヨーロッパとアメリカの各地を襲ったのでした。

潮は変わった

しかし聖書を誤りなき神の言であると信ずる神の民は、沈黙を守り続けたのではありませんでした。

①「理性によってわり切れないものは真実ではない」との仮説に対する真向からの挑戦がなされました。「だれの理性が決定権を持つのか」「理性に限界はないのか」という大切な反問が投げかけられました。

②「すべての物事は単純から複雑へと進化する」という前提にも重大な疑問が投げかけられました。

③モーセの五書（律法の書）、イザヤ書、ダニエル書その他の統一性についても、学問的な立場から明確な立証がなされ、考古学的な発見も次々にこの立場を裏付け始めました。「石叫ぶべし」と語られた主イエスの言は別の意味からも成就し始めたのです。

④破壊的な批評家たちが打ち出した仮説に対する反論が厳しく発せられました。モーセ、イザヤ、ダニエル等の記者性を否定した彼らは、「それではだれが書いたか」「その証拠は何か」等の質問に答えることができませんでした。彼らの打ち出す仮説を受け入れることは、神の霊感を信ずるよりも

はるかに大きな奇跡を要求するのです。しかも皮肉なことに、彼らはその主観的な結論の故に微細な点に関して互に一致することがないのです。

⑤彼らはさらに主イエス・キリストの権威をどう認めるか、の問の前に立たされました。旧約聖書の真実性・信憑性・純粋性を疑いもなく受け入れたもうたキリストの権威を否定することは、キリストの神性に対する重大な挑戦であると言わなければなりません。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

キャンベルはこの福音主義的な立場を総括して、次のように力強く述べました。

「潮は変わった。

・学識の面における高等批評との戦いは勝利に帰した。

・考古学は語った、石は叫びだした。

・写本は発見され、比較され、研究され、翻訳された。

その結果は、神の言を支持する巨大な、しかも増大しゆく証拠が与えられていったのである。敵は受身の側に廻され、退くことを余儀なくされた。かってないほど聖書はその主張する通りであることが示された。」

(註)

ここで私たちの立場を示す三つの用語に触れておくことが必要でしょう。

①「福音的」(エバンジェリカル)とは聖書に対する態度をさし、聖書を誤りなき神の言と信ずる立場を言います。(ただし、聖書をこのような意味で神の言と信じない人々が、自分たちを「福音的」と呼びはじめたので、近頃は「聖書信仰」という呼び方で区別することもされています。)

②「正統的」(オーソドックス)とは、教会において告白されてきた信条を受け入れる立場を言い

③「根本主義的」(ファンダメンタル)とは聖書的なキリスト教を要約した基本的宣言(原罪、キリストの処女降誕、贖罪の死、肉体の復活等)を受け入れる立場を言うと理解すれば宜しいと存じます。

第三章

聖書は神の言

――その証拠

「聖書は廃（すた）るべきにあらず」

（ヨハネ一〇・三五）

さて「聖書は神の言である」ということをその意味とその歴史という二つの角度から見て参りましたが、この章ではその証拠、すなわち「なぜ私たちは聖書を神の言と信じているか」を考えることと致します。

アメリカの偉大な伝道者D・L・ムーデーの後継者また同労者として久しく神に用いられ続けたR・A・トーレーは、なぜ自分が聖書を神の言と信ずるかとの主題について、以下の一〇の証拠を挙げています。（以下はトーレーの言葉に附註を加えたものであります。）

(一) イエス・キリストの証言による

イエス・キリストは、世の救主として来られた神の子であり、その言にはいつわりがなく、その業には権威と能力がともない、その生涯には罪がありませんでした。そのイエス・キリストは旧約聖書を愛読し、重んじ、信じておられました。

▽彼は一生の間、聖書を用い続けなさいました。例えば、受洗後に悪魔の誘惑を受けられた時、三度とも「……と録されたり」と旧約聖書を引用しながら、見事に打ち勝たれました（マタイ伝四・一―一一）。反対者にも、弟子たちにも、信仰者にも、キリストは聖書に記されていることを絶対的

な権威として語られました。

▽また聖書が永遠に変わらないことを証言して、「聖書は廃るべきにあらず」(ヨハネ一〇・三五)と語られました。そして聖書の言を信じない者を、「心鈍き者よ」(ルカ二四・二五)と戒めなさいました。

▽さらに最後の晩餐にはべっていた弟子たち(その中には新約聖書の八つの書を記したマタイ、ヨハネ、ペテロが含まれていたのですが)に、「聖霊は、汝らに万の事をおしえ、またすべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし」「真理の御霊きたらん時、なんじらを導きて真理をことごとく悟らしめん」(ヨハネ一四・二六、一六・一三)と約束されたのです。

▽キリストが神の言であると信じておられた聖書の無謬性を否定することは、キリストが無知であったとするか、キリストが偽っていたとするか、のいずれかであり、キリスト教信仰を根底からくつがえすものであります。

(二)

予言の成就による

聖書の予言は

選民イスラエル——異邦人——救主(メシヤ)——教会

の四つの分野に分けて考えることができます。くもの巣のように張りめぐらされた予言が、細かい点に至るまで成就している事実をどう説明すべきでしょうか。

例えば救主に関しては、

▽その先祖がアダム(創世記三・一五)、アブラハム(創世記一二・三)、ユダ(創世記四九・一〇)ダビデ(サムエル後七・一二—一六)であること、

▽その誕生地はベツレヘム(ミカ五・二)であること、

▽処女よりの誕生(イザヤ七・一四)

▽異邦人に伝道されること(イザヤ九・一、二)

▽病める者を癒されること(イザヤ五三・四)

▽貧しい者、弱い者を顧みたもうこと(イザヤ四二・一—四)

▽譬(たとえ)を通して真理を語りたもうこと(詩篇七八・二)

▽王としてろばに乗って来りたもうこと(ゼカリヤ九・九)

▽弟子に裏切られること(詩篇四一・九)

▽侮られて人にすてられ…おおくの人の罪をおうこと（イザヤ五三・三…一二）
▽その墓は悪人とともに設けられるが、死ぬときは富める者とともになること（イザヤ五三・九）
▽死後に復活すること（詩篇一六・一〇）等

枚挙に暇がないほどの予言とその成就を見ている事実は、聖書が超自然的な神の導きによって記されたまぎれもない証拠であります。

(三)

書物の統一性による

▽聖書が記された期間は約一五〇〇年、
▽その記者は約四〇人であり、
▽その職業、地位、環境、性格、時代、場所等を全く異にしていたにも拘らず

全巻にわたって有機的な一致が見られるのは驚くべきことであります。

ドイツのある大学の大教室で講義がなされている時、二人の学生の間で烈しい議論が始まりました。興奮した一人はやにわに腰からピストルを抜いて相手を射殺してしまいました。騒然とした学生たちを教授は静めて、これは彼が二人に頼んでおいた芝居であって、撃たれた学生は死んでいないことを

告げました。彼はさらに「諸君はこの事件の目撃者である。もし君たちが法廷に出頭してこの事件の証言を求められたらどうするかと仮定してレポートを書きたまえ」と命じました。その結果は言うまでもなく、学生たちの報告には非常に多くの不一致と矛盾があったと言うことです。聖書の統一性を考えると、これは人間的な角度からだけでは説明できない驚異であります。

聖書学者のスクロギーはこの統一性を五重の角度から説明しています。

(イ)構造的統一性――旧新両約聖書の間に見られる統一と調和

①一般的に

旧約聖書	新約聖書
基礎	上層建築
モーセと予言者	キリストと使徒
模型と予言	実体と成就
期待	実現

②具体的に

旧約聖書	新約聖書
人間に対する要求	人間になされた提供

「汝……すべし」
罪人の処置
律法による宣告
その終局は死
「汝の足よりくつをぬげ」
人間は約束し、それを破った
最初の質問――「汝はいずこにおるや」
（人を尋ねる神）

「我……せん」
罪の処置
恩寵による救い
その終局は生命
「その足にくつをはかせよ」
神は約束し、それを守りたもう
最初の質問――「王はいずこに在すか」
（神を尋ねる人）

(ロ)歴史的統一性

聖書の記者たちは互に相談する機会もなく、意識的に連続した歴史を書こうとの考えも持っていませんでした。しかし各書は互に密接な関連を持っており、いかなる書も全体の中で孤立しているものはありません。例えば、ネヘミヤ記九章は創造、アブラハムの召命、出エジプト、律法の授与について述べており、歴史書全体を総覧しています。ネヘミヤ記は旧約の他の書なしには考えることができません。聖書の物語は一つの切れ目のない物語です。

(ハ)予言的統一性

聖書中の驚くべき予言は、この書物が人の意志から出たものでなく、聖なる神の人が聖霊の力によって語ったことを記録しているのであると力強く立証します。〔予言の内容については四二ページの「予言の成就による」の項を御参照下さい。〕

(ニ)教理的統一性

聖書の啓示は漸進的でありながら、そこには調和が見られます。創世記の神は黙示録の神と等しく、旧約のメシヤと新約のメシヤとは同一です。

全聖書の主題は「贖罪」で、それは

・旧約において予期され
・福音書において成就され
・新約の残りの書において適用されています。

(ホ)霊的統一性

①全聖書の主題はキリストであり、旧約の全道路はキリストに通じ、新約の全道路はキリストから発しています。キリストこそ人間の最も深い渇望への解答であり、キリストこそ聖書に統一性を

与えるお方であります。

②旧約の真理と新約の真理との間に見られる一致と調和。例えばイザヤは「ああなんじら渇ける者ことごとく水にきたれ、汝らきたりてかい求めてくらえ」(五五・一)との招きを発しましたが、主イエスは「すべてこの水をのむ者はまた渇かん、されど我があたうる水を飲む者は、永遠に渇くことなし」(ヨハネ四・一三、一四)とこれに応じられました。さらに「なにゆえ糧にもあらぬ者のために金をいだし」(五五・二)と問いかけたイザヤに主は「朽つる糧のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け」(ヨハネ六・二七)と答えられたのです。

(四)

その教義が他のすべての書物の教義にくらべてはるかに優越していることによる

聖書はしばしばソクラテスや孔子等の著名な人物による教えや書物と比較されます。しかしトーレーはこれらと聖書との間に三つの大きな相違があることを指摘しています。

第一に、聖書は真理以外の何ものも含んでいません。他の書物は真理を含んでいますが同時に誤りをも含んでいるのです。

第二に、聖書は道徳的、心霊上の問題に関するすべての真理を含んでいます。トーレーはこの問題

について講演する時、道徳上、心霊上の問題に関する真理について再考した上で、聖書に見出し得ないものが一つでもあるならば示してもらいたい、と度々尋ねましたが、まだそれを示す事のできた人は一人もありませんでした。

第三に、聖書はすべての他の書物を合わせたよりもさらに多くの真理を含んでいます。

(五)

聖書の歴史、すなわち加えられてきた攻撃に対する勝利による

聖書ほど憎まれ、攻撃され、批判され、破壊されてきた本がありましょうか。

聖書の教義は烈しく攻撃され続けました。

聖書の教えを憎む為政者たちはしばしば聖書を焼き、聖書を破壊し、聖書を持っている者をそれだけで処罰しました。

無神論者ヴォルテールは「今から一〇〇年後に聖書の教えは廃れ、聖書は地上から姿を消すであろう」とさえうそぶきました。しかし皮肉なことに聖書は依然として世界のベスト・セラーであり続けまたヴォルテールの家はフランスの聖書協会に買い取られてしまったのでした！

聖書は常に勝ち続けてきた書であります。「天地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎゆくことなし」

と宣言されたキリストの言葉はこの意味においても真実であったのです。

(六)

聖書を受け入れる人と、それを拒む人の品性の相違による

聖書を信ずると公言する人はみな、聖書を信じない人よりもまさっていると言うのではありません。しかし聖書を全面的に受け入れて、聖書に従う人には、聖い品性が伴なうことは、否定し得ない事実であり、聖書を無視し、聖書を拒む人には、貪慾と傲慢が見られることもまた事実であります。

世界最大の宣教教会であるカナダのピープルズ・チャーチの創立者、オズワルド・スミス博士は、少年時代に一人の先輩から

「この本はあなたを罪から遠ざけ
　罪はあなたをこの本から遠ざける」

というモットーを与えられ、それ以来新しい聖書を求めるたびにこれをその扉に書き続けているということです。

(七)

聖書の感化による

ポケットの中に入ってしまうこの一冊の聖書にある力は、他のすべての書物を合わせたよりもはるかに大きいのです。この書物には人々を救い、潔め、造り変え、喜びと平和を与える力があるのです。

聖アウグスチヌスは「取りて読め」との声に従って取り上げた聖書の中の一節、「夜ふけて日近づきぬ、されば我ら暗黒の業をすてて光明の甲を著るべし」(ロマ一三・一二)によって造り変えられ、放蕩の生涯から聖い生涯へと踏み出したのです。救いを求めてなやみ、難行苦行していたマルチン・ルーテルに、「義人は信仰によりて生くべし」(ガラテヤ三・一一)の聖句は、救いを示し、やがて彼をして宗教改革ののろしを高く揚げさせるきっかけとなりました。またジョン・ウエスレーは「一書の人」であることを願い、それを実践しました。

いかなる書物がこのようなことをなし得ましょうか。個人だけでなく、社会と国民を高く引き上げる力をもつこの書の説明は唯一つ、すなわちこれが神から出た書である、ということ以外にありません。

(八)

聖書のつきない深さによる

この書には神の智慧と知識の無限の宝がかくされています。過去一九〇〇年にわたり、この本には

何物も加えられませんでした。すぐれた多くの学者たちの生涯をかけた研究にも拘らず、この書はきわめ尽くせませんでした。

ジョージ・ミューラーはこの聖書を一〇〇回以上読み通し、読むたびごとに新鮮であったと告白しています。人類の歴史の中にかってかかる本があったでしょうか。

(九)

私たちが智慧と聖きに成長するにつれて聖書に近づくという事実による

私たちは神の像に成長し、神に近づけば近づくほど、聖書に接近するのを発見します。神の立場に接近するに従って聖書との隔りが少くなるのです。言いかえれば、聖書は神の立場から書かれた神の言であると結論することができるのです。

(一〇)

聖霊の直接的な証詞による

聖霊は救われた者に、また潔められた者にその事実をうなずかせる直接的な証詞を与えられます。聖霊は愛する信仰者を無知のままで放置なさるお方ではありません。

聖書についても、聖霊は信仰者の心にこれが神の言であるとの深い、否定することのできない納得

とうなずきを与えたまいます。キリストは「我が羊は我が声を知る」と語られました。神の子らは神の声を知るのです。理論的に説明することはできないかも知れません。しかし信仰者は聖書のページから語る言葉は父なる神の声であると知ることができるのです。

結　語

人類の歴史の中で与えられた最高最大の書、聖書は「神の言」であります。この信仰が確立する時、私たちの聖書に対する態度はおのずから決定されてまいります。

筆者の父が神を知らずに放蕩の日々を送っていた頃、その伯母が祈りをこめて贈った新約聖書の扉には、

「読んで下さい、信じて下さい、実行して下さい」

と記されています。そしてこれはそのまま私たちの聖書に対する在り方であります。

読んで下さい

肉体のために毎日食事が必要であるように、霊魂のためにも毎日神の言――聖書が必要です。朝、目ざめて他のすべての仕事にとりかかる前に、心を聖書に向け、聖書によって生活を整えてから始める一日は、戦わずして勝利であると言えましょう。

「聖書を読む時間がない」と語られる方々があります。しかし日刊新聞の一ページ分の字数はヘブ

ル書全体の字数とほとんど同じであり、二四ページ分では、新約聖書全体の字数とほとんど同じであることを御存知でしょうか！　聖書を一章でも二章でも読む時間は志さえあれば、だれでも造れるはずです。

旧新約聖書は毎日四章づつ読むと一年で、一章づつ読むと四年で読み通すことができます。聖書を規則的に、熱心に読むことを生涯の変わらない習慣としたいものです。

信じて下さい

聖書が父なる神から与えられた手紙であるとするならば、私たちはどのくらいこれを尊重しなければならないことでしょうか。私たちは祈り深く、敬虔な態度で聖書に触れなければなりません。

「わかってから信ずる」ことも一面の真理ではありますが、信仰の世界では「信じてわかる」面があることも事実であります。聖書もその著者である神を知ることによって、より深く理解できるようになるのです。

一人の婦人が一冊の本を手にした時、少しの興味も覚えないでほうり出してしまったという話があります。しかし数年後にこの婦人はその同じ本を非常に意味深く読むようになったのです。彼女はこ

の本の著者と結婚したからでした！

実行して下さい

主イエス・キリストはあの「山上の垂訓」と呼ばれている一連の説教を〆括られるにあたり、

「我がこれらの言をききて、行なう者を、磐の上に家をたてたる慧き人になずらえん」

（マタイ七・二四）

と語られました。またヤコブも

「ただ御言を聞くのみにして、己を欺く者とならず、これを行なう者となれ」（ヤコブ一・二二）

と勧めています。

聖書に記されているのは霊の世界の法則であり、それは実践し、記されたとおりの結果を生じていくことによって、法則の正しさを証明するのです。実践を伴なわない聖書の拝読は砂の上に建てられた家のように、根拠のない、試煉に耐え得ないものであることを覚えたいものです。

「私はただ一つのことを知りたい――それは天にゆく道、かの幸いの岸辺に無事に着く手だてを。神みずからその道を私に教えようとして身をひくくしたもうた。まさしくこの目的のため主は天よ

りくだり、その道を一つの書にかきしるしたもうた。その書を私は持ちたい。いかなる価を払っても、その神の書を持ちたい。私はそれを持っている。この書には、私にとって十分な知識がある。私をして一書の人とならしめよ」

とジョン・ウエスレーは記しました。

聖書は神の言です。願わくは私たちが終生これを愛し、敬い、実践する者とせられんことを！

あとがき

信仰者にとって生命的な問題である、「聖書をどう見るか」との問に対する私たちの立場を宣証する本書を刊行できますことを心から感謝しております。

もともと本書は小生が月刊「教会学校」誌（イムマヌエル綜合伝道団発行）に寄稿した小論をまとめる予定でありましたが、主題の重要性を考慮して、改めて新しい構想のもとに執筆したものであります。

内容は独自のものでは決してなく、教団総理蔦田二雄先生から指導された事柄、H・S・ミラー著『聖書序論』その他の文献を参照した事柄に基づいたものであることを付記いたします。

信徒方にもわかりやすいようにと努めたつもりでありますが、本書がすべての信仰者の堅立のために益することあらんことを祈りつつ発刊の辞と致します。

一九七一年八月一日

竿代忠一

聖書は神の言　定価200円

1971年8月1日　初版

著者　ウェスレー・ブック・クラブ
竿代忠一

発行所　東京都板橋区中丸町11－11
日本ウェスレー出版協会

印刷所　東京都新宿区東五軒町18
モリモト印刷株式会社

東京都千代田区丸の内3－4－1（郵便番号100）
発売所イムマヌエル綜合伝道団出版局
電話　(03) 211－2789番
振替　東京133609番
（イムマヌエル綜合伝道団名義）

分類 220・1
© 日本ウェスレー出版協会 1971

日本ウエスレー出版協会・図書目録

1	ウエスレー	キリスト者の完全	400円
2	フレッチャー	キリスト者の完全	350円
3	ニコルソン	聖化論	600円
4	蔦田二雄	聖潔の生涯	200円
5	蔦田二雄	喜悦の盈満	250円
6	蔦田二雄	エプワースの流れ	300円
7	蔦田二雄	セキナの栄光	150円
8	蔦田二雄	18世紀英国の危機とウエスレー	50円
9	ル　ス	第二の転機	300円
10	キ　ン	信仰の盈満	300円
11	キ　ン	ペンテコステ的聖化	200円
12	S・リ　ス	理想の教会	280円
13	C・リ　ス	あまねくキリストを知らせん	100円
14	ヒ　ル　ス	聖潔と力	250円
15	セ　ル	旧約聖書の歴史	250円
16	スティール	聖化とギリシャ語時制	150円
17	フェイリング	聖潔の道　①	200円
18	フェイリング	聖潔の道　②	200円
19	フェイリング	聖潔の道　③	200円
20	ウエスレー・ブック・クラブ	現代ウエスレアン神学思潮	650円
21	ダンニング	サムエル・チャドウィック	250円
22	チャドウィック	キリスト者の完全への招き	300円
23	ウエスレー	メソジストと呼ばれる人々	200円
24	ウエスレー・ブック・クラブ	聖書は神の言	200円